新山協ニュース

発行者　鈴木敏雄　発行所　新潟県山岳協会
〒940　長岡市学校町1－12－23　室賀輝男方　TEL 0258－32－0428

少年 男子・女子

北信越突破！山梨国体へ！

新発田高校チーム

縦走　少女スタート

縦走　成男スタート　オープン参加

北信越大会を終えて

新発田高校　帯刀　勤

久しぶりに、長野県に勝った。そのうえに、少年男女ともに、山梨国体に出場が叶い、感慨無量です。（新発田高校は、今年、創立90周年を迎えましたので、90年に華を添えることができて、ほんとうに嬉しい。）

大会3日前から、現地で合宿し、トレーニングを重ねたこと。石川大会の選手で、OBの松本が激励に駆けつけたこと、などで選手の意気も、おおいに高揚はしておりましたが、踏査会場を、隅なく点検できなかった私達には、主要な道路、目標物を残らず実測して、資料を作られ、情報を教えてくださった、成年女子の監督の吉野さん、コーチの後藤さん達のおかげで、男子は踏査競技で、定点40満点をとれたことが、勝因となった。有難かった。（あらためて厚く御礼申しあげます。）

結果から見て、踏査競技の2点差が、「常勝長野県」にプレッシャーを、掛けることとなり、（縦走競技の時間点をみる限り）、長野の少年男子はプレッシャーのために自滅し、縦走―4位に落ちてしまった。（長野は総合得点で2位でした。）

長野の少年女子は、松本市内（会場から約18Km）高校チームのせいか、昨年の選手よ

り、練習量が多く、総合得点も高かった。（新潟）女子は2位、ともかく出場権を獲得できて嬉しい。

（新潟）成年女子は、ほんとうに惜しかった。踏査―1位、縦走―1位、登はん―3位でありながら、総合得点でわずか4点、富山に及ばなかったばかりに、山梨国体出場が叶わなかった。ほんとうに残念であった。チーム結成が1ケ月早かったなら。

女子は、「本大会では、長野に勝とう。」

男子は「やるしかないー、先輩よりも上位を。」

室賀会長をはじめ、応援、激励くださった方々に、厚く御礼申しあげます。

山梨国体では、全力投球いたします。

大会が終って

国体委員　山田智子

今年も遅巻きながら六月末になって、成女チームの3選手が決った。電話による強力な要請を繰り返して、ようやく誕生したチームである。決るとすぐに訓練を開始したが、大会迄4回しか日曜がなかった。最初の1回だけ赤谷で行い、あとは長野の会場へ通った。梅雨の最中で1日晴れたのみで雨ばかり。昨年の選手、後藤邦子さんは、連日一緒に現地通いをしてくれたが、顔ぶれの変らないコーチ陣にとって、選手経験のある彼女の応援は千人力であった。

今年は点数制になって7年、新潟で行われた大会から3年になるが、年々獲得点数が多くなっている。成女は踏査競技で定点確認、設問が満点、縦走競技の特区間もトップで突破するなど、地元長野勢を驚ろかせた。2日目の夕方、踏査の成績が発表になったが、新潟勢の結果に、長野勢は真青。私達も強い長野であるし、地元なので長野勢が1位を独占すると思っていた。長野との点差はわずかであったが、選手は最後の縦走競技にものすごいファイトを示した。長野勢はうかうかできないと気持を引き締めたであろうし、富山勢もやる気を見せつけてくれた。そのせいかこれまでの大会ではなかった熱気を感じ、真夏の太陽のように白熱したレース展開となった。

今大会を振り返ると、この3年間〝こうあるべき〟と理想として話し合ってきたいくつかのことが、実現しつつあるのではないかと感じさせられた。特に、いつも長野勢の集まりの良さを羨しく思っていたが、今年は新潟も大会前から4チームが協力し合って大会を迎えた。あたり前のことが思うようにいかず、これまで県代表でありながら4チームが個々に参加しているような、疎通に欠けた淋しい状態だった。なんとか一体にならないものかと課題にして来たが、ようやく〝新潟県チーム〟に近づいたのではないかと思う。満足のいかない環境の中でも、一ツ一ツ良い方向に向かっていると思うので、出来得るものなら、指導員として登録されておられる多くの方々に、1シーズンにお一人が1日訓練に参加して下されないものかとお願いしたい。時間節約の車の移動や、食事作りに人手を要するし、時計係など軽作業ながら重要な作業が沢山あるので、なんとかならないものかと提案申し上げたい。

今大会の話題を拾ってみると、縦走競技の特区ゴールで、先にゴールして休憩していた成女チームに迎えられた少年女子チームが、自分達の健闘を喜こんだのは勿論であるが涙を見せ、成女チームがもらい泣きをしてしまった……とか、少年男子チームの1人が誕生日で、夜、花火で祝ってやったりとか、縦走競技終了後に、成男チームのアイスボックスで冷したスイカを全員で食べるなど、これまでには見られなかったほのぼのとした場面もいっぱいあった。また、岩登りの経験がなかった成女のBさんは、1回目の訓練にどうしても登ることができず、誓約書と承諾書の押印を待って下さいと言い、印鑑持参で2回目の訓練に出かけた。皆んなの励ましの中で、何度も登り返す彼女の根気、そして登れた時の〝ヤッター〟という声にジーンとさせられ、この努力はこれからの人生に、あの時あんなに頑張れたんだからと、

縦走ゴール　成女と少男がトップで同時ゴール

いつかきっと思う日があるにちがいないと共に喜こんだ。毎年ぎりぎりのところで選手が決り、未完成のままで大会を迎えるが、いつも思うことは、短い間の訓練に見せる選手のひたむきさに、何かをしてやらなければと思わされてしまう。ほんとうに素晴しい人達が揃うのである。私はささやかなお手伝いしかできないが、選手達との出会いは、何にも優る代償である。

競技大会である以上、参加すれば勝つことを要求されるが、今回のように、2種目も1位を取りながら、本大会にエントリー出来なかった成女チームには、勝たしてやりたかったという、ちょっとやそっとの残念ではない気持を味わった。成男と少年男女には成女の分までも頑張ってもらいたいと思う。まだ大会が済んで1週間もたっていないが、終了した時に見せた、たんたんとしていたAさん、一生懸命やったから嬉しかったと言ったBさん、来年に闘志を燃やしたCさんの、成女チーム三人三様の笑顔が頭から離れない。

（7／30　記）

北信越大会に参加して

成女選手　高田ハイキングクラブ
飯島　秋子

大会が終った。「これからはのんびりできる」という嬉しさと、反面、一つの目標をなくした叔しさと、複雑な気分である。

岩登りの練習が、精神的には一番つらかった。山歩きは大好きで、一人でもヒョイヒョイと出かけたりもしていたが、岩登りというものは、やった事がなかった。わけのわからない道具をいっぱいつけて、岩に取りつく時の、あの心細さ。何度も何度も滑って落ちたから指の先の皮が練習の度毎にむけてしまい、最後には、指紋がわからなくなってしまった。

仏崎の岩場で、どうしても登ることができずに、悔しさと、回りの人への申し訳なさに不覚にも泣いてしまった。その時、コーチの後藤さんに「人には得手不得手がある。登れないのはあなたの責任ではない。ただ、自分の出来る限りの事をすれば良い。」と言われた。この時のことは忘れられない。その後、何度かの練習で、何とか登れる様になった時は、本当に嬉しかった。

国体の競技は、厳しい、と思う。15Kgのザックを背負って、山道を走る。空を眺め、木に手を触れ、風に吹かれる。そんな、私たちが、好きで好きでたまらない「山」とは、全く違うものだと思う。でも、どうなのだろう。縦走競技の特区間、3人でフラフラになりながら、倒れ込む様にゴールした瞬間のあの「やったぁ」という充実感。これも一つの山の楽しみ方だろうか？

この1ケ月間に経験したことは、いつかきっと役に立つと思う。それに、たくさんの優しい人達と出会う事ができた。みなさん、頼りない選手でごめんなさい。心から感謝してます。また、どこかの山でお会いしましょう！

成女　登攀競技

岩登技術講習会実施報告
――6月22日・新発田市杉滝岩――

技術委員長　平田大六

1. はじめに

本年度の岩登技術講習会を、新発田市の杉滝岩で計画し、50名の参加者のもとで、実施したので報告する。

従来、ややもすれば、行き当たりばったりの講習会となり、参加者にも充分満足感が得られなかった点を反省した。その結果、指導項目を明確にし、複数の講師であっても、同一の指導助言がなされるよう、配慮することとした。このため、委員と講師の事前打合せ会を、5月28日、6月16日と2回にわたって行なった。

事前打合せ会では、主として、指導項目の選定と、講師の分担などについて検討した。

2. 指導計画

1 指導事項

①ザイルの結び方

(1)ブーリン結び　(2)8の字結び　(3)インクノット

(4)ブルージック (5)テグス結び (6)ゼルプスト8の字 (7)テープ結び (8)二重ブーリン

②用　具

(1)ゼルプストバンド (2)ヘルメット (3)カラビナ (4)シュリンゲ (5)ハーケン (6)ハンマー (7)手袋 (8)ボルト (9)8環

③登り方（フリークライミング）

(1)3点支持 (2)ホールドスタンス (3)ルートファインデング (4)クライムダウン

④確　保

(1)肩 (2)胴 (3)グリップ (4)半マスト (5)セルフビレー

⑤懸垂下降（アプザイレン）

(1)8環 (2)肩がらみ

⑥登はん

(1)ブルージック登はん (2)隔時登はん

⑦脱　出

⑧タイヤ落し

[2] 指導分担

安野正弘 ①②
三富一弥 ①②③
阿部信一 ④
今成幸夫 ⑤
吉野良介 ⑥

[3] 班編成と指導内容

A…未経験者　①②③④⑤⑥
B…A・Cの中間　①②③④⑤⑥
C…経験者　④⑤⑥

各自の自主的報告によって編成する。

[4] 指導方法

①② 平地で集合指導
③ 岩場で個々に
④⑤⑥ 岩場でパーテー毎に。⑤の基本はモルタル吹付の壁で。

①→⑥の順序で進行し、各自がマスターしたところで、次の指導事項へ移ること。⑦⑧は時間があれば行なう。

3. 実　施

前夜の6月21日の夜、約3分の2の参加者が集合し、予定通り7時から実施した。参加者の中には、8月上旬に行なわれる指導員検定会受検者、本年度国体山岳競技出場選手もいた。

午前中には、ほぼ①～④くらいまで終り、午後は、⑥まで終了し、大部分のものが、⑧のタイヤ落しの衝撃を体験することができた。全体として、実施できなかった項目は⑦の「脱出」だけであった。

終了は、予定より30分おくれて、15時半頃となったが、閉会式で、各講師より、それぞれ講評をしてもらった。

4. 反　省

講師の事前打合せ会を行なって、指導計画をたてて実施したのは、今回がはじめてであった。このことは、たいへん効果的であり、講習会が混乱なくスムーズに実施できた大きな原因のひとつになった。

次回からは、この指導計画を、反省検討して、加除することによって、よりよい指導計画が出来あがってゆくものと期待する。

この講習会の実施にあたり、宿泊幕営地などの設営では、県山協の杉原八百樹指導委員長、それに、雨天のことを考慮されて、自治区の大テントを持ってきて張ってくださった、越稜山岳会の内藤新一郎さん、講師のアシスタントをしてくださったエキスパートの登山家の皆さんに感謝申しあげる。

最後になってしまったが、今回の申込みは、「6月15日必着、〒で」ということでお願いしてあった。これをきちんと厳守された、長岡工業高等専門学校山岳部の方々には敬服する。あたりまえの事にたいして、何故私が敬服するのかと云えば、事前申込みは、この一パーテー6名だけだったからである。実は、この申込みがなければ、参加者ゼロということで、私たちは、中止するつもりであった。あらためて工専の方々にお礼申しあげたい。

概して、山岳団体の集りというのは、事前申込み制になっていても、これをキチンと守られてきた例がない。これは、山でも平地の会合においてもである。「その日暮らし」のいいかげんな仕事をしておられる会員ばかりでもあるまい。徐々に改めていってもらいたい悪習のひとつである。

5. 参加者（本入記入分のみ）

（ゆきみ山の会）弦巻英市、手島ひろみ、島谷由美子、（朝日山岳会）遠山実、（水原山の会）榎本明人、早川節子、金沢博徳、伊藤信明、（新潟山岳会）斉藤厚子、五十嵐欣也、堀口寿彦、本田俊二、小島賢一、角木修、金子恒夫、小島修、坂井和美、島田時明、大塚朝一、伊澤正隆、阿部信一、小田浄一、吉田進、（越稜山岳会）細山良男、内藤新一郎、川崎博、山田智子、今成幸夫、（悠峰山の会）後藤邦子、坂井武夫、（高田ハイキングクラブ）飯島秋子、（荒川ワンゲル）小川馨、山口宏幸、（関川村山の会）平田大六、（峡彩山岳会）須藤正雄、（長岡高専会）小池高徳、池嶋剛、岩渕和有、長谷川豊、岩井裕、（高体連）安野正弘、（山友会）本間建秋、（モンテローザ）小柴裕生、高木邦彦、（モンテローザ、望遠）小林弘、（デラシネ山の会）吉野良介、高橋秀樹、藤田和博、（ピオレ）三富一弥、（下越山岳会）杉原八百樹 以上50名

第3回自然保護研修会終る

自然保護委員長　石田国夫

5月31日から6月1日、中里村清津峡温泉〝古屋旅館〟において、第3回自然保護研修会を開催した。今回は行政側より講師をお願いしようということで県環境保全課自然保護係の石塚勝俊さん、中里村役場観光課の富井和雄さん、津南町役場観光課の吉野政明さんより来ていただいた。

初日は、1.「奥越後の観光開発の現況」、2.「観光客、遊山客、登山者の施設利用についての提言」、3.「観光宣伝広告等の実情と問題点」の3点について、地元の2名の講師より説明を受けた後討論会を行った。小松原湿原の木道が取り上げられ、施設の利用の仕方について話し合い、最低限の開発で自然を保っていかなければならない行政の苦しみを感じた。観光開発と自然保護についてどのように調和を図っていくかが今後の課題である。

翌日、県の石塚さんより、1.「自然公園等の保護と管理」2.「自然公園等の管理と実態」3.「規則の対象となる行為」4.「指導員へのお願い」について講義を受けた。その後実地研修ということで、津南町の天下の名水〝竜ケ窪の池〟を見学した。当初〝清津峡〟を予定していたが、残雪が多く交通止めになっているため、コースを変更した訳であるが、別名〝立石の池〟とも言われる地下水の湧出による沼は、県の自然環境保全地域に指定され、環境庁水質保全局の指定を受け、全国31ケ所の名水選に選ばれたということで、地元の講師お二人からいろいろ説明を受け、大変良い実地研修となった。

今回の研修会は、参加人数を30名程度予定していたが、あちこちで山開き等の山行が重なり、参加者が半減されたことは、残念であったが、場所よし、人よし、酒よし、最後に温泉もよしの良いものづくしの研修会であった。

最後になりましたが、津南町山岳会の清水さん、桑原さん、津南町役場、中里村役場の関係者の皆様方のお骨折りにより、この研修会がスムーズに運営されたことを感謝申し上げ報告といたします。

遭難事故防止のために
未組織登山者を組織に迎えよう

遭難対策委員長　五十嵐篤雄

登山する人は誰れでも楽しい登山を願っている筈で、最初から事故が起きることを予測して山に入る人はないと思う。しかし登山は相手が大自然である以上、登山者の不注意、経験不足による判断の甘さ等が事故を招き、それが遭難につながる場合が多い。

登山が大衆化され、登山人口が増えてくると事故が増えるという正比例は自動車事故によく似ている。年齢的に10代後半から20代が圧倒的で、覚えはじめて2・3年、自称ベテランで楽しくて仕方ない、という時期である。

自動車の場合は、道路交通法を勉強し徹底的に運転技術の訓練をうけ、試験に合格した者が免許証をもらい、天下晴れて自動車を乗り廻すことができる。それでも連日事故は後を断たない。

山は法令による制限はない、知識も免許証もいらない、誰れが何処の山に登ろうと全く勝手自由である。基本的知識、訓練を必要とする車の運転や他のスポーツと異なるところであろう。

山に登る動機は千差万別、一例を挙げると、格好いいから、健康増進、ストレス解消、近頃御婦人の間では美容と健康のため等があり、まことに結構な話である。しかし登山も続けているうちに、楽しくなってき、自信がついてくる。何時の間にかポピュラー的山から、よりむづかしい山とエスカレートしてゆく。

登山用具専門店へ行くと、その用具さえあれば四季を問わず、どんな厳しい山でも登られるような錯覚を起こす最新式登山用具がズラリ並んでいる。本屋へ行けば他のスポーツに見られない程多数の本があり、山好きな人の心を奪うようなガイドブック、高度な登山技術書等があり、好きな用具を集め、好きな本を読んでいれば、好きな山に行けるから、今更うるさい先輩の多い山岳会に入る必要はない。ということになろう。

こうゆう登山者を仮に未組織登山者とすると、山岳会に所属している登山者を組織登山者ということになる。

全国山岳遭難対策協議会で毎年発表される遭難の比率は、未組織登山者が圧倒的に多い、組織登山者だから事故がないという訳ではないが、相手は大自然である以上、人間の知識で予測、予知のできないアクシデントが起きた場合、それに対応できる心構えがあるか、ないかでその危機から脱出できるかが決まる。

組織内では豊かな経験を持つ多くの先輩、リーダーがおり、専門部門を担当し県内は

勿論、全国からの情報を収集し、登山者の研修、講習、訓練、啓もうを行なっているので無知、未熟、無謀が原因の事故は避けられる筈である。

未組織登山者を組織に迎えることが遭難事故防止の第一歩になるのではないか。

菅名岳冬山研修会

昭和61年3月1日～2日

峡彩山岳会　山田　勲

講師、地元裏方合せて、総勢56名もの参加をいただいて、感謝と御礼を申します。

さて、1日目の猿和田公民館での座学は、日本山岳会越後支部長、佐藤一栄さんよりの講話である。年に数回の単独行をやってみよう、レポートに強くなること、良い山仲間を多くつくる、この3つのお話が永年の経験より裏打ちされた話し振りの、深味あるトーンで、聞き入る参加者の方々に少々の緊張感も与えていたようだ。2番目は研修テーマの「冬山におけるホワイトアウト時の計器登山」で、上村さんの担当である。このテーマこそ越後に住む岳人が、徹底的に身に付けないことには、晴れ間の少ない厳冬の山で、行動日より停滞日が多くなると云う笑うに笑えぬ結果となるのだ。峡彩山岳会では、3代目会長時代の佐藤一栄さんの頃より、不正確な5万分の1の地図でしごかれ、研修に勉めたものである。その後間もなく、2万5千分の1の地図が出廻り、読図の技術は飛躍的に向上したのである。小さな沢や見落す様なコブが、地図に正確に刷されているのである。少々驚き、嬉しくなったものである。これら長い間のノウハウを集約しプリントしたものです。しかし、これの基礎となっている事実は、いつ、いかなる山であっても、地図を自在に取出して、現地照合を徹底してやってみることに尽きるだろう。この経験の積重ねが視界ゼロメーターの山中を、悠然と往く自信に継げてくれるのである。

次は「ラッセルワークの実際」となり自分の担当である。大方の皆さんが肌で知っていることを数字にしてみた。

ラッセルをどうやるか、ではなく、ラッセルとメンバーと距離と時間の関係を少し分析してみたのだ。テーマから、少々ずれたのはお許し願いたいが、ここから、ではラッセルをどうすればいいのだッ、と云う疑問が湧いてくる。

むささび会担当の、「冬山における緊急ビバーグの実際」は、遠藤会長さんより現地での実訓練との事で終了し、懇親会へと移行しました。

夜明前には、チラついていた雪もやみ、朝日も輝いていた、小山田沢中間まで合同で行き、A班、丸山尾根へ、B班、花見尾根へと別れた。山は、冬と春の端境でゆれていた。B班は花見尾根より今ひとつ上手の尾根に乗って高度を稼いでゆく。再び晴れた小山田沢の沢筋に、3匹ものカモシカが望見され、対岸のA班とのコールが交された。

鳴沢峰の手前から軽い風雪となり、鳴沢峰頂上からは視界30m前後となって、研修会日和りとなった。尾根の方向の変る辺、菅名岳との中間でB班はすでに雪洞掘に掛っている。そこそこの風雪であるが、声が通らないので降ってから第3テーマをやることにし、昼食後、A、B班交差して反対コースへ降った。稜線上は強風で、踏跡はすでに消えている。計器登山の実際は、声が通らぬことを忘れていた。これだけの人数を、手信号ひとつで集めたり進めたりするには事前の打合せが必要だ。稜線を100～150m程降りると、風雪は急速に弱くなる。両班朝の分離地点にて合流し、第3テーマを、むささび会の加藤さんから説明していただく。研修後、現地解散となりました。

主催者側として、いささか反省すべき点もあるが、参加の人達も、今すこし熱ぽくても良いだろうし、参加の意志表示は早い方が良い。

重ねて、菅名山岳会の皆様御苦労さんでした。

◇参加山岳会名

九期、菅名、ピオレ、デラシネ、峡彩、むささび、新潟鉄工、十日町山路野、矢筈、悠峰

冬山技術研修会に参加して

菅名岳　3月1日～2日

ピオレの会　阿部結花

県山協主催の冬山技術研修会とあって、他の山岳会の人達が多勢いる中、私はついていけるのかという心配といささかの緊張と共に参加しました。

出発始は晴れ。登り口でワカンをはいていると雪がチラチラ……しかし、だんだん晴れてきて快晴。この時は汗をかきながらラッセルというものを2回程やったのですが、見た日より大変きついものでした。しかし、快晴の中の登りはあまり苦にならず、楽しいものでした。この後、吹雪

になろうとは思ってもいなかったのですから。10時半頃から吹雪となり、ひどくなるいっぽうで周りは真白。視界は数メートル。尾根も沢も見えず、進む方向は地図、コンパスに頼るのみ。本当に、研修目標の一つであるホワイトアウト時における計器登山そのものでした。地図とコンパスの必要性を思い知らされたのは、登りだけでなく、帰りの猛吹雪の中を頂上へ向かう時もそうでした。当然残っているものと、あてにしていたA班のラッセルの跡がなくなっているのには驚きでした。相当な経験者でもまちがえそうになるのですから、冬山はやはり、経験が浅く、技術・知識のない者にとっては怖いものです。しかし、今回はベテランの方々がついていたおかげで、ホワイトアウト時も何の不安もありませんでした。悪く言えば、私は完全に頼りきっていたと言えます。本格的冬山は初めての私も何とか無事山行を終えられ、リーダー他行動を共にした仲間に感謝します。

運がいいのか悪いのか、吹雪に見まわれ、ホワイトアウトの中の冬山と快晴の中の冬山、天国と地獄を一度に経験した思いでした。

この日、初めて出会ったカモシカには何となく親しみを感じました。

第3回韓日親善登山
2月28日～3月3日
智異山（1915M）

越稜山岳会　山田智子

二転三転の末に訪韓日程が決り、慌しく機上の人に――そんな感じがする第3回韓日親善登山の出発であった。最終的には、室賀会長、下越の五十嵐さん、荒川の佐藤さん、私の4人になってしまったが、昨年は何度もお誘いの手紙や電話を頂きながら、とうとう訪韓できなかったので、今後の交流を考えて、今回は少人数でも行こうということになった。平均年令約50才の我熟年？パーティは、一般の観光客とは一風変った出立ちで一路韓国へと向かった。

2時間位たつと、思い出の中にある風景が窓越しに見えはじめ、懐しい山男達の顔が次から次へと浮かんだ。2年振りの人、3年振りの人、皆んな元気でいるかしら？　誰が迎えに来てくれているのだろう？　早く逢いたい！　金浦空港を眼下に高度を下げながら揺れる機体と同じく、私の心も踊っていた。

58年6月の訪韓の際には、ザックの中を全部チェックされて時間がかかり、皆さんが首を長くして私達の出て行くのを待っていたが、この度は係員に山岳会の人がいて、計画表の提示をすると、ノーチェックで通してくれた。おかげで早くロビーに出られたが、迎えに来ている筈の人達の姿が無い。捜しても見つからないので電話をかけると、2時間も前に出たと言う。1時間位ロビーの中を右往左往して、やっと「ハンニョン　ハセヨ」となり、懐しい人達と再会することができた。

3年前は、挨拶くらい韓国語で、と覚えたのであったが、いざ皆さんに挨拶されたら、頭からきれいに消え去り全くおはなしにならなかった。今回はすんなり「アンニョン　ハセヨ」と出た。この一言であとは言葉などなくても皆んなニコニコ顔。金会長は「日本語会話」なる本を広げて一生懸命。こちらもアンチョクをしのばせての片言会話だ。しかし皆さんも私も3年前よりは進歩していて、お互いの国の言葉を少し話せるようになっていた。「アンニョン　ハセヨ」と握手。それに頼りない単語の羅列会話だったが、心が通い合っていることを感じながら再会を喜こんだ。空港前で記念撮影を行うと、車7～8台に分乗してソウル市内へと向かう。ビル街の一角に在るホテルへ案内され、日程の打合せが行われた。出発前に送って頂いたスケジュール表の通り、3泊4日の超過密スケジュールが組まれていた。1時間後の6時半には観光バスでソウルを発ち、智異山の麓へ向かう予定になっていると言う。通役なしの打合せなので、一番日本語を話せる金昌変氏と、一番韓国語を話せる？私と、筆談優先の会話。智異山の麓迄7時間もかかると言われながらホテルを出て集合場所へ案内されたが、道々、山へ登ることや滞在中の不安はなかったが、言葉が不自由なので通役なしということが最大の心配事になった。「カムサニダ」だけでは申し訳なかった。気持は通じているのかもしれないが、もう一言何かを言いたかった。が、「カムサニダ」の連発とスマイルで精一杯。韓国勢も、長岡弁、新発田弁、荒川弁、新潟弁の訛りある私達の会話に驚ろいたことだろう。

ビル街の路地にバスが停っていて、山姿の人達が賑やかにしていた。40人程が同行するという。この日のリーダーは韓大湜氏で、山行計画を話してくれた。韓氏は日本語が全く話せず、英語と漢字の筆談で、山行に関することを了解。地図と行程、時間、山の

概要などB4の両面にコピーされた計画書を渡されたが、縦走をする計画で1日22キロも冬山を歩くのだ。大変である。休憩時間抜きで、スタートからゴール迄510分と記されてある。6時出発、17時下山完了、18時出発、24時ソウル着というタイムカウントであった。強行軍でも私達のために組んでくれた皆さんのご好意なのである。

夕方のラッシュで混雑するソウルの街から高速道路へ入ると、マイクを使って韓氏が話を始め、続いて金瀧夫氏の挨拶がある。雪岳山、谷川岳、白馬岳などこれまでの経緯を話されておられたようであった。終ると私達に韓国語でスピーチを、と韓氏。そんなこと出来るわけがない。会長はでんとかまえて、山田さんやれさね、とさらりとおっしゃる。それでほんの一言、「皆さんこんにちわ、お逢いできて大変嬉しいです。明日の智異山よろしくお願いします。」とおぼつかないハングル語で挨拶。通じたかどうかは分らない。

車内では、韓国側からペナント、私達から無償調達のカレンダーと酒の銘柄入升杯を交換したりして親睦を深める。日本語を話せる人がいないので、寝たふりでもしないかぎり、チンプンカンプンの韓国語で話しかけられる。さっぱり分らないから大変なんてもんじゃない。いつの間にか会長と五十嵐さんはお寝みになってしまい、佐藤さんと私は受け応えに四苦八苦。しかし、完全とはいえないまでも、韓国語、日本語、英語をチャンポンで話すのだからたいしたものです。とにかく高速道路を走っている間は悪戦苦闘で頑張った。その内山道へ入り会話も中断。カーブが多いうえに段々道も細くなっていき、照明のないデコボコ道はバス幅ぎりぎり。窓越しに外を見ると、ボデーの下は道が見えずに絶壁、川は所々氷が張って流れも早い。とてもおそろしくおしゃべりどころではない。おのずと、落ちたら？　と考えた。シートベルトを締め直した人、はずした人、後日談で皆さんいろんなことを考えていたことが分り大笑いをした。縦走なので帰りに通らなくてもよいことがせめてもの慰めだった。肝を冷すこと小1時間、行く手に灯りが見えると、肩の力が抜け、本当にほっとした。暗くて回りはよく見えなかったが、山小屋が何軒かあるらしく、薄暗い灯りが点々としていた。駐車場には他にもバスが停めてあり、あの道を仕事とはいえ往復している運転手さんはすごいなあと思う。

真夜中、やっとオンドルの山小屋へ落着く。同室は金昌変氏の妹さんと、音無しのかまえで麓迄来たガイド嬢。二人は視線が合う毎にニコッとするだけで言葉は通じなかったが、色々と心遣いをしてくれた。4時半起床なので早々に寝ることにしたが、入口のホールからはホエーブスの音が聞こえ、酒好きはどこの山屋も同じなのだと、意味の解らない会話を聞きながら眠った。

ホエーブスの音で目を覚ますと4時。オンドルの温かさと寝不足で、起きなければと思いながら、もう少しもう少しと布団にくるまっていた。5時過ぎ、朝食ですよとドアをノックされる。男性陣の部屋へ行くと、焼肉のいい匂いと、ニンニクがプンプンする真赤のキムチが待っていた。炊きたての白い御飯は山男達の心づくしである。焼肉は1斗鑵を下度半分にした位の入れ物にぎっしりつまっていて、どんどん焼いてくれる。人参茶もたっぷり飲まされ、スタミナ倍増まちがいなし。「もう、はあ、たくさんであります。」と五十嵐さん、分ってか、分らずか、韓さんはニコッと笑った。

六時半、明るくなり始めた中を出発。積雪は50～60センチ位で、乾燥した雪。私達には4、5人の人が前後についていて、何くれとなくお世話をされている感じで、立止まると一緒に止まり、チャンポン会話を行う。休憩は殆んど無く、タバコに火をつけると、ゴーゴーと早く歩き出すことを促すのだ。結局、頂上小屋（8合5勾位）迄休憩なしで歩く。見上げたピークが頂上かと思いきやまだ先とのこと。それに小屋も満員で寒く、10分いたかいない内に、また歩き出す。大分前から降り出した雪に風も出てきてホッペがピリピリする。高度が上ると積雪も深く、サラッとしているような踏跡も、気を抜くと青氷に足を滑らせてしまう。

智異山山頂にて

下山後の記念撮影
（晶元山岳会関係者と）

与えられた。それも30分。昼食はノリに御飯を巻いた、さしずめ長いおにぎりというところ。若い女の子が色々とお菓子類を代る代る持ってきてくれた。ニコッとして差し出すだけで言葉はないが、私達はカムサニダ（ありがとう）を繰り返す。

下山は早いものであっという間に着いた。登りは遅かったが、下山は早い方で全員が揃う迄時間があり、〝食わず〟の腹を満たすため茶店へ入る。焼酎とおでんと豆腐でようやく人心地が着く。ほぼ満腹で1人2千ウォン（5百円強）という安さ。焼酎の名は〝舞鶴〟とあり大変飲み口が良かった。

智異山は標高こそ1915mだが、岩山で奇岩が多く見られ、夏でもなかなか厳しそうである。山の概要が書かれたものを頂いたが、勉強不足で今だ分からず仕舞いこんでである。山の全容も景色も望めず、ただ雪と氷の感触だけは充分味わった智異山であった。

時間の無い私達のために強行軍を行ったバスの中で話をされていたが、山ばかりでなく、予定より1時間も早く帰路の出発をしたが、3泊4日、オールナイトを地で行くように、真夜中にソウルへ着いてからも街へ連れ出される。腰かければ酒とキムチ。山では飲まず食わずだったが、ソウルの2日間は常に満腹状態だった。最後の夜は前回と同じく金社長宅へ招待され、韓国料理のフルコースをご馳走になった上、螺鈿の素晴しい楯を頂いた。短い日程でも通じ合うものはいっぱい感じ、この次逢えるのは何時かと、お世話はなった多勢の〝金〟さん達の顔を想い出しては、再会を楽しみにしている。

多勢の金さん、カムサハムニダ!!

智

頂上真下では猛吹雪で、マイナス20何度とか（何度かは言葉が通じなかった）。アイゼンの調子が悪くて、少し遅れて頂上へ着き、皆さんに寒い思いをさせてしまった。記念写真を撮るとすぐに下山開始。この頃は、もうお腹がへってペコペコ。しかしゴーゴーと急がされる。朝から飲まず食わず出さずで歩くこと7時間半。2時に昼食休憩をやっと

第41回国体県予選会

杉本　敏

期日　昭和61年4月26日（土）～27日（日）

会場　新発田市

縦走　焼峰山　27日

踏査　長峰原　26日

残雪がまだ多量に残る二王子山塊の麓を会場に、今年度の国体予選会が実施された。上赤谷の赤谷社会教育センターで開会式を行ない、長峰原の方へ車移動する。少年男子10チーム、オープン1チーム、成年男子2チームの参加である。会場は第4回北信越国体時に使用された所で、丘陵あり、小さな尾根越え、徒渉点（仮橋セット）ありと変化に富んでいる。ただ時代の趨勢で舗装道路が長くなったこと。豪雪のあおりでコース上に残雪があり、読図歩行に困難をきたすことである。曇り空の中、5分間隔で次々とスタートする。チームで45Kgの重量を背負い、規定時間100分以内に約11Kmのコースを踏破すると時間点50点がもらえ、途中のポイント（定点）8～10ケ所を地図上、4mmの⊗印の範囲内に納める。ゴール間際で観察の出題が5問用意されている。

時間点を稼ぐ為に夢中で歩くと、現在地点の定点を正確に把握できない場合が生ずる。常に3名が地図と巡らの地形を符合させながら歩まねばならない。

田貝川を溯り二王子神社を通って南俣集落に出るコースをセットしたが、3チームが二王子神社を経由せず南俣集落へのコースに突入してしまった。顕著な建物がコース上にあるのに疑問をいだかず短路を通ってゴールしたことは、読図力が今一歩の感がある。本大会では失格行動になる。雨に打たれ、汗にまみれ、徒渉点で濡れ頑張った選手に敬意を表したい。

赤谷社会教育センターに戻り、代表1名による天気図の作成。幕営はセンターの建物

を借りて、昔の教室に何パーティーか集い夕食交換会を行なう。

27日晴。縦走スタート地点滝谷集落まで車輸送。1分間隔でスタート。集落を抜けるともう残雪のコースになる。特区間のスタート（ウグイス平）からゴール（修蔵ノ峰）まで25分以内でゴールの場合50点。滝谷集落から競技終了点の黄金清水に50分以内でゴールの場合、歩行点10点。他に、装備点、天気図、計画書、記録（指定）幕営で100点満点の配点となっている。

今回は残雪が多いとのことで、コースを短かくし、焼峰山までの残りの部分はサヴによる集団行動とした。晴天に恵まれ遠方から参加した選手にとっては、感慨深いものがあったことと思う。本来なら監督はコース内立入り禁止であるが、上記理由により、希望者だけ後発で焼峰山山頂まで登ってもらう。

成績は、少年男子は新発田高校が第1位で、7月25日～27日長野県大町市で開かれる第7回北信越国体に出場することが決定した。成年男子は新井アルパインクラブが優勝。山梨国体での健闘をお祈りします。

初登頂に燃えて

越稜山岳会　山田智子

7月20日朝、会員に見送られて、4人は元気で新潟を発っていった。58年のネパール、クンブヒマール・メラピーク、6476m、60年のインドガルワールヒマラヤ・スダルシャンパルバット、6507mに続き、KR6、6187mに挑戦する会員の海外登山である。このたびは初登頂がかかっている。いつものことながら5人の予定が2人になり、B・C上部迄トレッキングの2人が支援してくれるという隊編成が、ぎりぎり迄決まらなかった。それでも当初の予定通りに、行動が開始になって嬉しかった。すでに体調もいいと、現地からの第1報が届いた。無理をせずに元気で頑張ってもらいたいと思っている。

※　8月5日、7月26日マナリー発信の第2報が届いた。

「一行9名とポニー12頭のキャラバンは、7月31日B・C（4750m）到着予定で、順調に行動しており、越稜の旗を頂上に立てたいものです。」とあった。

智

◎◎◎　計画の概要　◎◎◎

1. 遠征隊の名称
   越稜山岳会1986年インドヒマラヤ遠征隊
   Etsuryo　Alpainclub
   Indian　Himalayan　Expedition 1986
   略称　E.A.I.H.E 1986
2. 目標の山及び地域
   1) KR6（6187m　77,19°32,40°）
3. 目　的
   1) 未登峰の登頂
   2) 6100m峰の全員登頂
4. 期　間
   1986年7月～8月
5. 隊員構成
   隊長　長谷川昭一（29）総括、医療、戦術
   隊員　春日谷厚尚（22）渉外、装備、食糧
6. 遠征日程
   昭和61年7月20日　成田出発、21日　ニューデリー着、23日　ニューデリー発、24日　マナリ着、27日　マナリ発、28日　パテシオ着、30日　キャラバン開始、8月2日　BC着、8月3日　登はん開始、12日　登頂予定（13日～18日　予定日）、24日　BC発　リターンキャラバン開始、26日　マナリ着、27日　マナリ発、28日　ニューデリー着、29日　ニューデリー発、30日帰国

山の紹介

テレフォンサービス

NTT村上電報電話局では、山の紹介のテレフォンサービスをはじめた。山は、北下越の山々で、紹介者は各地区の山岳会員である。ダイヤル025 4（53）2000をまわすと、1日中、その山の案内を聞くことができる。山名、期間、紹介者は次の通り。

「日本国（555m山北町）」8/6～8/19　平方芳子（山北町）
「要害山（287m神林村）」8/20～9/2　鈴木勘助（神林村）
「鷲ガ巣山（1093m朝日村）」9/3～9/16　鈴木清市（村上山岳会）
「立鳥帽子（690m関川村）」9/17～9/30　横山征平（関川村山の会）
「新保岳（852m朝日村）」10/1～10/14　小田捷寿（朝日山岳会）
「石黒山（968m朝日村）」10/15～10/28　海沼順一（朝日山岳会）
「高坪山（438m荒川町）」10/29～11/11
信田瑠美子（荒川ワンダーフォゲル）
「朴坂山（438m関川村）」11/12～11/25　渡辺忠次（関川村山の会）
「下渡山（237m村上市）」11/26～12/9　片野　清（村上山岳会）
「虚空蔵山（520m朝日村）」12/10～12/23　遠山　実（朝日山岳会）
（文責　平田大六）